

社会学における「社会」と「個人」の問題 (一)

——概念的両極化についての批判——

安 西 文 夫

I

社会学は人間問題についての解明を独占的に委託されたわけではない。他の諸学問が、それぞれの立場から、直接にか、間接にか人間を問題とする。社会学が人間の問題に介入する権利は、その基本的性格に即して、限定されざるを得ないのである。同時に社会学はこの問題の解明にのみ、限定されるのでもない。それにしても人間に関する、社会学の発言は口はばったく、排他的で、ときとして不遜にわたることすら、あるように思われる。たとえば、「社会」と「個人」との関係は、わがもの顔に社会学文献に場所を占めて、その全面的解明を社会学が一手に引きうけるような、おももちである。教科書の著作の多くに特徴的にとりあげられる「社会实在論」と「社会名目論」との対置に見られる単純なとりあげかたと相いまって、ここでも学問の世界における社会学のひとりよがり、恥かしい思いをそそののである。

もともと、社会と個人との対立および関連を、とりあげようとして、「社会实在論」対「社会名目論」の論議を、よりどころにするのが、奇妙なことに思われる。定義的にいえば、「社会实在論」とは全体としての社会ないし集合体の、それ自体としての实在性を主張して、個人を遊離された存在と見る見解であるのに反して、「社会名目論」は個人こそが実在的なものであって、社会ないし集合体は幻想でしかないとするのであって、たがいに相手を否定する

排他的な処論である。事実の实在性についての優先権を競うのである。ところで前の主張は社会の存在を、後の主張は個人の存在を支持することになり、社会と個人とは、ともに相手を排除する関係に対置されるのであって、したがって、この対立はたてまえとして、宥和をこえた決定的な対決関係とならざるを得ない。

社会学が「实在論」対「名目論」の論議に、かつて長期にわたり強い関心をいだいたことについては、いくつかの理由が考えられる。この論議が、すくなくとも中世にまでさかのぼり、普遍と個別との实在性をめぐる、果てることもない激しい宗教的ないし哲学的論争の歴史を背景として、ルネサンスを契機とする自由な創造意欲の主体者としての「人間」と、近代初頭の絶対主義的国家に対抗して次第に、その姿を見せはじめた「社会」との存在根拠をめぐる争いとして、新たな火種とならないではおかなかった。近代の夜明けとともに展開される、人間についての自覚と礼讃とは、関心の個人への収斂を通じて、とかく自己中心的な思索の対象となる。他方、かつて述べる機会があったように、「『市民社会』を中心とする絶対視があった。特に絶対主義的国家との角逐において勝利をおさめた社会は形態において最高至上のものとして、また歴史上発展の極致を示すものとして、理想化されねばならなかった。」〔1:25〕さらに18世紀の啓蒙思想に育てられた機械論の原子論は個人主義的人間観を盛行させ、他方、19世紀にいたって市民社会の成長は社会有機体説に代表

されるような、社会についての「全体観」をおしすすめる。あらためて「社会」と「人間」とは、その存在の最終的決着を「実在論」対「名目論」論議という権威ある法廷における裁断にゆだねるのである。

社会学にとっては、もう1つの因縁がつきまとう。19世紀から20世紀への移りかわりはエルンスト・カッシーラーの言う「実体」概念から「機能」概念への変化によって表現されるような、この学問の基本的な進路の変更を意味することになる。19世紀の初期社会学は総合的・百科全書的・歴史哲学的な全体性を強調し、20世紀の社会学はゲオルク・ジンメルが代弁する個別的・分析的・要素還元的な、またその意味で科学の名に値いすると称せられる方向を指向する。前者が「社会」の全体性を、後者が究極的存在単位としての、「個」としての人間を支持するのは当然の帰結であった。社会学の対象領域を巨視的に全体把握するか、或いは微視的に要素的個別性においてアプローチするか、J・ピアジェの言う「認識論の態度が、構造的法則をもった全体性の承認か、それとも要素から出発する原子論的合成かといった二者択一に帰せられる」〔2:9〕事態、換言すれば全体把握的(holistic)手法と方法論的個人主義との、いずれに依拠するかは今日の社会学にとっても支配的な課題をなしているのである。

この対立が問題把握の手法ないしアプローチの違いであるかぎり、それは方法論的な基本線の相違であって、立論の権利そのものは平等にあたえられるので、二つとも成立するといわねばならない。これに決着をつけるのは、それぞれの収める認識論的な効果であろう。したがって両者が、自らの正しいこと、相手の誤っていることを挙げて論陣をはっても、多くの場合、不毛の戦いに終わるであろう。オランダ出身で、永らく英国に在住した社会学者ノーバート

・エリアスは、この点に關説する。「多くの人がびとが、これか、あれか、——分子論者であるか、全体把握論者であるか、でしかあり得ないと信じているように見える。二群の論敵同士が環になって、ぐるぐる回りをし、各が自らの思弁的で、検証不可能な論者を擁護するのに、第3の選ぶべき道がないという根拠に立って、同様に思弁的で検証不可能な相手の論者を攻撃することによって行う論争ほど、おもしろみのないものはない。」〔3:73〕絶対化されたそれぞれの立場には第3の道はあり得ないし、それを探求する意欲などは生じようもない。

ところで包括的、総合的な社会的部類と個別的、特殊なそれ、われわれの主題に限定すれば「社会」と「個人」とが、全体と部分との関係に整理されて、体系的系列の両端に極化されて位置づけられるとき、その対立は表面的には休戦状態に入るように見える。1つは普遍性をめざし、もう1つは特殊性に向う2つの魂が統一化されるヘーゲルの「市民社会」や、個別的な私利の追求が「見えざる手」の介在に媒介されて公共の利益につながる円満無礙な調和は社会と個人との友好的関係の理想的な姿であろう。しかしこの宥和のかげに、両部類は絶対化されたままで範疇化され、固定化された概念として、自らの存在を主張する事実忘れられてはならない。社会と個人とが全体と部分との関係という口実を得て同等の市民権を主張し、それらの関連が相対化されることもなく、また何らかの方法により統一化されることもなく、ただ平板に社会学の対象領域の中に座を占めたまま、本質的には尖鋭な対立をもち続けるのである。

社会と個人との概念としての対立には、上述のいくつかの歴史的因縁にうながされた側面のほかに、この対概念が19世紀後半から今世紀前半にもてはやされた二分法による類型概念の設

定という手法の賜物の1つであることが思い出される。分類の方法は、いずれの学問においても比較的初期の段階に特有のものであるが、社会学ではその影響は根強く、今もこの段階は終わったといえない。二分法による分類の標的とされるのには社会と個人とは好適のものであった、といえそうである。この場合にも、これかあれかの対照的な性格に両極化されたところに意味がみつめられるのである。この視点からいえば、社会・個人論議は、伝来の「社会実在論」対「社会名目論」論議と、二分法にもとづく類型化による対概念に対する愛好とを両親とする、社会学的理論の発展の順序からいえば、ハンス・ゼッターバーグが、その第3と称する「分類の段階」にきわめて特徴的な想念であろう。

II

対概念として類型化され、範疇的に固定化された、これらの概念の成立は、多かれ少かれ認識論的には、思考の自己中心的な絶対化と類縁をもつように思われる。J・J・ルソーの「自然人」は彼自らについての内省の投映でしかなく、地球の表面をくまなく周遊した欧州の探険家たちは異国の文化に接して、自国での体験および既成の知識を下敷にしてしか見聞できなかったし、近世以来散見される擬人法にもとづく人間および社会に関する理解と表現などはその例である。思考の自己中心性からの離脱の努力が、いかにたどたどしかったか、またいかに困難であるか、については度たび指摘されるところである。理性的存在を自任し、事がらを相対化して見ることに習熟していると自負する人が、その自負もろとも自己中心性のおとし穴に落ちこむこともある。自己の内部の世界に埋没し、そこでの種類のいとなみを掌中の珠と溺愛すれば、外の世界には眼も耳も閉ざされる。こ

れらのことはたしかに事がらを相対的に見ることを阻む。しかしそれだけでは、社会学においてこれほど大きな普遍性をもって、対照的に並列される概念の成立を説明してはくれない。

特定の歴史的状況にうながされて生まれでた「人間」にしても、「社会」にしても、発生の当初は幼弱ではあっても洋々たる未来を負うものとして、潑刺とした積極性と豊かな内容とを待望された害である。人びとはそれらを新鮮な姿として迎えたにちがいない。一時は古典主義哲学者によっては「全人」としての全人格の発現と、人びとの要求を全面的に充足する社会の映像が、かいま見られもしたのである。ところが時代を経て、欲得には敏感でありながら心貧しく、ときには過社会化されて虚無的な人間と退嬰的で現状の維持にのみ汲汲たる社会の姿だけがのこる。人びとはそのような状況を与えられた、あたりまえのこととして是認し、諦念し、ときとして狂信的な帰依の対象として、その護持をはかるのである。現代社会において人間疎外はますます進行し、人間は歯車の片片たるひと齧としての「役割人」に終始することになり、社会は個人にとっての「うとましい存在」としての性格をますます濃くしながら、ひとりあるきをする。ヘーゲルの近代社会の2つの魂の間に亀裂が発生し、拡大し、ついには償い難い本格的な矛盾と断絶を結果する可能性をつねにふくむ。他面、意志の自由を賦与され、基本的人権を保証され、個性的であるとともに理性的であることを人間が要求されればされるほど、社会の秩序への、人びとの誘導、統合が強化される。これらの状況は社会と個人の分離、対立をともしなわないではおかないのである。この事情こそ社会と個人の分裂を強く印象づけることに関連をもったのであろう。

社会と個人の概念の実体化は、これらの概念の示す事象の実在性(reality)の問題に深くか

かわる。ともに実在性を独占的に求める傾向は「實在論」対「名目論」の論議とともに古い。何ゆえに社会や人間が実在的であることが主張されるのであろうか。かつてジョージ・A・ランドバーグは「社会」の実在性の主張のうけた反応について説明を試みた。「諸個人を『社会』と称せられる新しい単位に綜合したり、この構成諸単位と同等の実在性を要求したりすると、はげしい対抗に出あう。……新しい単位はわれわれの心理的な焦点集中——すなわちわれわれの思考習性——における再適応を要求するのであって、これは苦しいことなのである。したがって新しい単位は『非実在的』、『模擬的』であり、したがって排撃すべきであると考えられるのである。」〔4:95〕とし、また社会と個人の双方について「これらの範疇の或るものを他のものに対比して、その一次的ないしその他の内在的な『実在性』を強調することは、科学においては言語記号の本性についての原始的な観念の証拠と見られるだけである。」〔5:194〕とし、一般的に「いかなる次元の単位も便宜上の構成物でしかなく、それ自らの神秘的な実在性をもつ形而上学的な統一体ではないことは、いくら強く強調しても、すぎることはない。」〔4:95〕という。この操作主義の立場からの、実在性論議の形而上学的性格に対する批判的態度は時期を同じくしてクルト・レヴィンにも見られる。『『實在』に関する論議は性質上、形而上学的に見え、したがって経験科学にもちこまれることは期待されないであろう。』〔6:189〕とレヴィンは考えるのであるが、問題の複雑なことをも指摘している。「ところが事実においては實在か、非實在かについての見かたは経験科学においてきわめて通例のことであって、科学的発展に積極的にか消極的にか、大きな影響をあたえた。」〔6:189—190〕とし、また「何かを『非實在』と称することは科学者にとって、それが『立入禁止区域』

にあることの宣言にひとしい。或る項目に『實在』が当てはまるとすることは、この項目を研究の対象として考察することを科学者の義務とすることであり、そのものの属性を理論の全体系において無視され得ない『事実』として考察する必要のあること意味するものであり、最後に、ひとがその項目に言及する用語が科学的『概念』として（単なる語としてでなく）、うけいられることを意味する。」〔ibid.〕とも言われる。すなわち或る事からの実在性の認定は、それを表示する概念の、学問の世界への通行権を認めることにつながるのである。レヴィン自らは「論理的には分子、原子ないしイオンの実在性の間に、或いはもっと一般的にいて全体と部分との実在性の間に、区別を設ける必要はない。」〔6:192〕として、実在性について冷静で中立的であるが、自然科学の領域で実在性に関する論議の対象となる機会の多かったのが極微の世界であったのに、「社会諸科学ではその実在性が疑われるのは部分ではなく全体であることが通常であった。」〔6:191〕として、さしあたり集団についての「実在性」を強調する。しかし彼の、集団に代表される全体の「実在性」の強調は、その絶対化につながるものではない。彼が生い立ったゲシュタルト心理学の水準における集団の単なるゲシュタルト的性格に満足するとか、その全体性が既定のこと、或いは所与のものとして直観的に容認されるとか、という立場にないからである。さらには集団に重点において group dynamics をおしすすめるのはアプローチの戦略であって、心理学の対象領域としての個人の次元を無視したり、省略したりする意図から出たことではないからである。

類型概念の設定はかならずしも現実的世界との直接的な結びつきを要求するものではない。現実からの或る程度の距離をへだて、したがってそれだけ非現実的であることによって、現実

そのものの理解に役立つ認識論的手段であるところに、その効用がみとめられよう。マックス・ウェーバーの「理想型」は歴史的個体ではなく、しかもそれから距離を保つことによってこそ、比較を可能にする観念的擬制である。類型概念が実在的であることを要求することは認識論的手段としての、その意味を忘れることを物語るものであろう。或いは類型概念そのものの設定が自己目的であったり、また分類的企図がおちいりがちな、類型や分類そのものが学問活動におきかえりたりする事態を招くものである。この種の墮落した類型概念や分類作業こそが実在性に依頼しようとするのである。

或る特定の項目、或いは多くの場合、或る用語について緻密で周到な概念規定を行うことも、類型に盛りこまれた概念内容の稀薄をめぐる自己不満ないししろめたさの表現ではないであろうか。新たなパラダイムの導入にともなう新しい概念や思考様式、充分習熟していない用語については、定義の要求する条件を充たす規定が必要であり、また結構そのような努力に、いそがしい学問は数多くあるのである。しかし社会学では精細な概念規定、スコラ学派を思わせる、もって廻った詮索、要点のはずれた冗漫な叙述が、そのままこの学問の内容を構成しているようにすら思われる。十人十色の社会学の中で、特定の事がらをめぐる十人十色の概念規定で特色を競う姿は壯観というよりほかはない。Gemeinschaft と Gesellschaft についての定義は F・トニースの哲学的思索に端を発して、後続の社会学者たちによる解釈、修正、基本的な考えかたの変更の延々と続く歴史を綴る。ところで「社会」と「個人」との対概念に限定していえば、あれほど実在性を競いあい、現実的であろうとする、これらの概念が定義の場面では煩瑣なまでに思弁的で抽象的な体系性を追求する事実はどうに折合いをつけられ

るのであろうか。

次に、この対概念の範疇の絶対化——実体化は、どのような論理的結果を生ずるのであろうか。直接の結果は概念の物象化に現われる。すなわち他ならぬ社会的な、また他ならぬ人間的な事象が物理的なそれとして取りあつかわれ、もともとの本質的な諸性質が歴史的、文化的の内容とともに捨て去られる。物象化は概念の画一化をとめない、一方では個性的、価値的な内容の豊かさを剝奪し、他方では事象を変換性ないし流動性のない「永久不変」の法則に服従させる。

まず社会について事態を見よう。その限界事例として全体主義的社会概念、たとえばナチスの社会的全体観を挙げられよう。もっとリベラルな社会における、ピアジェのいう「直接的全体性」(une totalité immédiate) ないし「いかにしてということ」を明確化し得ないような、のしかかってくる全体性」(un tout s'imposant) [2:9] を示す社会概念が一般に支持され、よりどころとされている。方法論的個人主義をたてまえとする人びとをも含めて、社会学者にとって既成の、あたりまえのものとして認められた常識的な社会概念の相当多くのものが本質的には類似するに思われる。社会学者は多くの場合『『全体』や『全体性』という用語を使用することによって、1つの神秘を解くために、1つの神秘が創始される」(エリアス) [3:9] ことに深い反省を示さない。たとえデュルケムの未開社会を原型とする「同質的統一体」としての社会は多くの賛同を集め得ないとしても、統一体としての全体性を無前提にあたえられた社会が否定されるわけではない。デュルケムの社会が、たびたび物理的なないし生物学的存在との類推によって叙述されるのは、彼の社会概念の特徴をあらわしている。単純な、同質的統一体としての社会は単純な形態の機械的形成に、よ

り複合的な社会は、その諸部分が機能的に連結されて統合的体系をなすような有機的統一に、類比される。それは単なる比喻としてではなく、社会の存在論的特性としての叙述である。「社会現象を『物』として取りあつかうべきである、という戒告は存在論的なものではなく、方法論的原則であると想定されるものであった。」〔7:119〕しかし「人間の行為に対する社会的作因の影響を立証するのに、また観念論と戦うために、疑いもなくデュルケムは正しかった。」〔7:120〕としても、この戒告が認識論的心がまえとして、どこまで守られ得ようか。社会概念そのものの物象化として解釈される機会をあたえることがなかったであろうか。或る著者たちはデュルケムの、この戒告が、社会現象の実体化の1つの実例であり、しかも物象化の形式をとる実体化であることを指摘する。ただデュルケム自らが、この場合の「物」が物質的なそれではなく、非物質的な「物」として、いいかえれば外部からの観察と実験によって分析すべきことを主張したに止まることを読み分けている。しかしデュルケムにおける社会現象の実体化が徹底的であって、独立の存在論的なstatus、しかも個人の側からの変更を許容しない超越的な位置を与えられる。〔8:188〕このキートンの指摘は尊重されるに値する。

デュルケムの社会の概念はすでに時代おくれで、現代に通用しないと考える人も多いであろう。しかし彼とともに典型的な規範的機能論者であるT・パーソンズの社会概念との類似ないし関連を見おとすわけにはゆかないのである。社会の統合性ないし全一性、個人すなわち人間との分離と対置、統一体としての実体化と固定、生物学的類推など、デュルケムとパーソンズとが共通にする、概念規定の示す類縁は否定され得ない。私は「パーソンズの機能理論ないし構造・機能分析の基礎そのもの、集中的には

『社会体系』概念に示される均衡的・自然成長的構成が機械論的ないし有機体説的類推に貫かれている」〔1:33〕ことを指摘したが、彼の社会概念の、生物学的次元への還元は、範囲、詳細、強度のいずれの側面においても、デュルケムをはるかに凌駕するものである。デュルケムの「直接的全体性」を拒否し得ても、パーソンズに対する私淑ないし傾倒を示す社会学者が多数派を占める日本の社会学界では「おしつけがましい」この人の社会概念が、まだ主流をなしているというべきではなかろうか。

次に個人をめぐる事態はどうであろうか。「社会にとりかこまれながら、同時に見えざる障壁によって分断されている」（エリアス）〔3:15〕孤立化された個人は実体化——固定化——物象化——抽象化の過程を経て帰結される人間の姿である。社会の場合と同様に、それは個人を低次元の存在として、機械的ないし生物的範疇に属する存在として取りあつかうからである。エーリッヒ・フロムの語り口にならえば「現代資本主義の基本的な経済的特徴」としての量化と抽象化は「経済的生産の領域をこえ、人間の、物に対する、人びとに対する、および自らに対する態度にひろがる。」〔9:113〕これや、あれやの人物の具体性や特異性においてではなく、個人としての人物を包含する種としての「人間」が定立されるとき、われわれは「抽象的人間」を見出す。対象を具体性と抽象性との両面において把握する両極性のうち、現代西欧では後者が独断的に強調されるのである。人間は「異なる質ではなく、異なる量を体現する妖怪」〔9:114〕に化せられる。同様に「人間が自らの力や豊かさの能動的な負荷者としてではなく、自らの生きる実質を投下した、外部にある力に依存する、正体を失った『物』として自らを経験する」〔9:124〕とき、われわれは「疎外された人間」の残骸を見出す。他方、近代社会の

観念的表現である「個人主義」はわれわれの生活感情の深奥に定着して、個人としての意志や思想の自由、存在および活動の独自性、自己利益の追求を正当化する。遊離され疎外された個人は、すべての他者、社会さらには自己自らに対しても対立的で、分離の過程を強める。自利の追求のためには戦いこそ増幅されて、友好は圧迫される。相互の和を唱えるものがあるとしても、彼は現代の平均的生活信条である個人主義を停止するものではない。

Ⅲ

もちろん社会と個人との分離ないし対立についての反省や和解の試みが、社会学において行われなかったわけではない。両者の対立を放置することによって生ずる好もしくない結果が考慮されたのである。社会学の対象部門の体系化に消極的な影響があるとか、社会学的見かたの一貫性がそこなわれるとか、さらには、この対立を超克する第3の道が探求されねばならないという自覚につながるとか、その意図は種種であって、いくつかの解決策が提出されるのである。

(1) クーリー／ミード。ともに社会と個人との同一性をみとめ、これを「同一物の両面」という表現を用いて述べる。のみならず自然の成立と社会の発生とを同一の事がらと見、自我の相対化を契機とする社会化の展開によって、ともに類似する描述によって、これを解明しようとする。また、ともに社会的役割についての創始者のな着想をもち、しかもこれを社会と個人との統一に利用する。クーリー／ミードの処論は多分に思弁的な要素を含みはするが、社会と個人との積年の分離を総合するという、正当な方向への転換を示唆する良き意図を示している。しかしこの良き意図も総合の全面的な変換過程に関しては、その解明は不徹底であって、

内化と社会化との過程を通じて総合が強化されねばならないし、総合の両面は分裂して、もとの社会と個人に分離する危険をつねにはらむように感じられる。本格的な発生論的裏づけに時代的制約をうけざるを得なかったのであり、それは特にミードの畏友、ジェームズ・M・ボールドウィンの手によって児童の心理的発達に関連して打開される。

(2) ランドバーク／レヴィン。ともに社会と個人のそれぞれの水準における実在性を平等に容認し、しかも実在論論議そのものの形而上学的性格についての消極的態度を示すことについては上述した。そのかぎりでもともに社会と個人とが「同一の理由」にもとづいて存在するとする。社会と個人とを含めて、いずれの統一体にしても、その全体的特性の確認は比喩的には、ランドバークによれば、認識のレンズの焦点移動によって行われ、必要にしたがって、その焦点の結像するところに特定の統一体の存在が認められるとされる。この立場によれば社会と個人とは存在としても、概念としても、何らの対立関係におちいることなく成立するのである。——ランドバークのこの解決策は、統一体としての社会や個人を羅列的に、また観想的に並列するだけである。「すべての単位は、その実在性ととともに、その正当化可能性の標準であるところの、人間の便宜性による構成物である。」〔5:172〕ところで、この「人間の便宜性」は、各構成単位間の関係の制約の不確定につながる。われわれはこの見かたの破綻を、類推に対する彼の姿勢に見る。「ランドバークは類推一般の効用を否定するものではない。彼は『いふまでもなく類推は人が新しい問題を考究する場合の最もみのりの多い方法であった。』といい、……また『われわれは新しい事態に直面して、これと、われわれが親近である事態との間に或る種の類似を発見し得るのでなければ、ま

まったく無力である。』とまでいい、……類推の役割をたかく評価するのである。』〔17:9〕

レヴィンの場合には、全体社会のような包括的で巨視的な事がらではなく、集団、特に小集団のような微視的な状況において比較的の小規模にあらわれる全体性がとりあげられ、このように限定された社会的全体（集団）が構成単位を個人ないし諸個人、或いはそれらの示す属性における類似に直接の関係をもつのではなく、むしろ諸個人の間の相互依存性に基礎をおく「動的全体」としての、そのかぎりでゲシュタルト性格を示すというような、しかもこの動的全体としての集団の成立と生長の諸過程をとりあつかう「集団力学」は、いわば共時態における観察と実験によって把握されようとする。ここでは社会と個人との並列的な図式は影をひそめる。ということは集団の形像のクローズアップの前には個人の存在が消え去ることを意味し、これによって問題の全面的解決が果たされたとはみとめられない。レヴィンは個人行動を心理学のとりあつかう領域に帰属させるのである。〔17:12〕

（3） リット／ギュルヴィッチ。ともに社会と個人の統一を考える立場は、どこかグーリー／ミードのそれに強い類縁を示唆するが、リット／ギュルヴィッチの場合は、さらに「視界の相互性」の用語を用い、これを立論の基礎におく点で多分に、ランドバークの認識の焦点移動の考えかたに接近する。リットにおける社会と個人とは「構造的にたがいに制約しあう極」であり、それらが弁証法的綜合によって統一化される。この場合の統一は、したがって論理的にも、また事実としても必然性をもつものとされる。〔12:265〕すなわち社会と個人の概念はたがいに、その概念を条件づけ、予定し、そのありかたを必然的に要求することによって、両者の対立が超克されるのである。

ギュルヴィッチの「視界の相互性」は深さの諸相の間の関係についていわれる。

ところでギュルヴィッチにとっては、19世紀社会学の方向を特徴づけた「個人と社会との間の闘争の問題」すなわち「抽象的で、完結的で、不可還元的な実体」の間の「宥和のない永劫の闘争」は今日では「ただか社会学が関心をもち得るとしても終了した。」とされる。現在「問題となるのは、1つは他なくしては考えられず、その生は相互参加のうちに成立つところの諸要素」〔13:26〕の弁証法的綜合であるとする。「個人は社会に内在的であり、社会は個人に内在的である。その相互の内在性によって社会は『私』の深層のうちに『私』は『われわれ』の深層のうちに再発見される。」とし、マルセル・モースの「全体的人間」と「全体的社会」とは全面的に相蔽うという表現を賞揚する。〔13:27〕

ギュルヴィッチはまた社会と個人との概念的固定化が「闘争」の錯覚の基調をなすことを見おとしてはいない。「特に社会の結晶化した側面、すなわち慣習、儀礼、習俗」が「創造的な沸騰状態にある個人」〔13:29〕に対立させられる。固定化——絶対化による社会と個人との両極化分離が指摘されるのである。

社会と個人との対立の統一ないし宥和についての、上にのべた、いくつかの対策の試みは、その多くが社会集団を中心に、領域を限定し、手法としては思弁的ないし観想的であり、ギュルヴィッチを除けば、変動ないし変換性の側面からの観察を欠く、という共通の特徴をしめす。しかし今世紀前半の科学理論の状態に見られる時代的制約を考えあわせるとき、これらの試みの積極性はたかく評価されなければならない。特にギュルヴィッチの場合には今世紀後半における問題処理の動向を強く予示し、いくつかの方法論的要点が準備されていることがみと

められる。

しかし全般としては、これらの解決策は単純であって、社会学教科書などにおける取りあつかいを大はばに改変するほどの効果を取めるものではない。これに比較して、今世紀後半にはいると問題処理は大がかりで、多種の方法を駆使する sophisticated な段階を迎える。依然としてそこには社会と個人との対立ないし並列があり、それをどのように整理して体系の中に組みこむか、或いは問題を白紙にかえて第3の道を開発するかは、おそらく社会学の学問としての、これからの展開に重大な影響をおよぼすように思われる。新しい方向を模索し、或る程度の説得力をもつ主張の1つに、役割理論に基礎をおく人間論がある。それは1種の人間論であるばかりでなく、社会学的に見られた役割人としての人間が、社会と個人との融合を一身に具現して現われるという構想を帯同するだけに、われわれにとって興味ある試みであるように思われる。

この方面で画期的な論文 “Homo Sociologicus” をラルフ・ダーレンドルフが執筆したのは1957年である。〔14〕その後5回の転載にも、ほとんど手を加えることがないが、1973年「厳密には社会学的であるよりは批判的、哲学的である。」〔15:91〕と述懐する。その間に「立場を修正し、練成することをせまる」多くの著述が出版されたが、基本的には、この新生の社会学的人間を否認する理由がない、とする。〔15:vii〕ところで彼の Homa Sociologicus は社会的役割の担い手としての人間であり、homo oeconomicus と同様に科学的構成物にすぎないのであって、現実の全一的存在としての人間とは異って、社会の中に、役割を負担することによって析出される。換言すれば Homa Sociologicus は社会と人間とが交錯するところに、それらを

媒介し、それらの統一者として誕生する。「全体的個人」(der ganze Einzelne) すなわち「全体としての、一回起的で自由な存在としての、精神的な人間像」と「役割の、分割され、例証的な、決定された寄せあつめとしての科学的な人間像」との間の必然的矛盾の中に析出される Homa Sociologicus は、社会学にとって積年の課題であった社会と人間との関係の究明の鍵としての意味を示すのである。〔14:135〕ダーレンドルフの立論の背景には社会と個人との対立が社会学にとって致命的なばかりの決定的問題であって、その解決こそが、この学問の最大の使命であったこと、また彼はそのための試論として、しかも多大の自信をもって Homa Sociologicus を提唱することが、あると思われる。

ダーレンドルフにとって社会学は社会という腹だたい事実 (die ärgerliche Tatsache der Gesellschaft) 〔14:131〕に直面する人間をとりあつかう。この腹だたい事実とは、われわれの単純な経験にも通用する事実であり、「われわれを世界に結びつけ、これら両者のきわめて具体的な抽象を媒介する第三者：すなわち社会」〔14:132〕のことである。それはデュルケムの、個人に対して外在的で拘束性をもつ社会的事実と親近な類縁をもつ。〔14:131〕「人間は、いずれの人間も、この事実面に直面するし、実にこの事実そのものにほかならない。」〔ibid.〕「というのは社会は特定の個人とは独立にとらえられようとも、特定の人間なくしては意味のない擬制であるからである。」〔ibid.〕したがって、社会的な人間と人間を内容とする社会とは相即のものであるが、「社会の中の人間を対象とする科学の諸要素は、人間と社会の事実とが交錯する領域に求められなければならない。」〔ibid.〕ということで社会と人間とが交錯するところに、社会的に既定の役割の担い手としての人間 Homa Sociologicus が立っていることになる。しかも

個人と社会的役割とは相即のものであり、「この役割は今度は社会の腹だたしい事実なのである。」〔14:133〕 このように社会と人間、社会的事実と個人の間には単なる関連以上の相互滲透があるのであるが、そのような姿の統一は、それぞれがたがいに埋没するとか、一方が相手のみこんで消滅させるとか、ということにはならない。かえって「社会学的分析の単位を社会集団にみとめる」やりかたでは「集団の中に個人は消滅し、また集団が要素として認められると、社会学者にとって社会的存在としての個人にいたる道はなくなる。」〔14:132〕 さらには「人格 (Persönlichkeit) すなわち個人の社会的人格そのものが要素として認められると、社会の事実を考慮することが困難となる。」〔ibid.〕 逆に、統一が問題となるのは、これらのものがそれぞれ或程度の自律性をもつ範疇に属するからでもある。

われわれは Homo Sociologicus の所在の存在論的位置づけを問うべきではない。どの程度に現実的であるかというようなスコラ派的概念詮索も適当ではない。この野心的な社会学の人間が、社会学に課せられた積年の難問に、どこまで解答を提供し得るか、この著者はどこまで社会学を書きかえ得るか、の問題が、はるかに意味をもつ。ところで「人間の作成した諸力の手に委ねられ、しかしこれらの諸力を避ける機会をもたない全く疎外された人間」〔14:151〕である Homo Sociologicus は既定の役割を賦課され、負荷されることによって社会との関係を獲得する。そのありさまは役者が演劇の筋書に書きこまれた役柄をあたえられて、ギリシャの古典劇ではこれを表示する仮面をつけて、舞台上に登場する様子を思わせる。長年にわたって育てられた演劇用の用語、仮面、ペルソナ、役柄、役割などは社会学的概念としての役割の原点を示す。それらの間の類縁は比喩や仮託以上

のものである、とされる。役者は役柄を捨てることによって人間に帰り、人間は社会的役割を身につけることによって社会学的人間になるのであろう。それ故にこそ、社会と個人とを媒介するものとしての役割と演劇用語としての役割との、この語呂あわせは社会学者のあいだで、ひろく愛用される。「人間は社会という壮大な芝居の中で劇的役割を演じ、すなわちこれを社会学的に言えば、人間はそれを行うのに着用しなければならない仮面そのものである。」〔16:123〕とピーター・バージャーはいう。——しかし、この語呂あわせのかげに、役割概念の固定化、実体化がかくされてはいないであろうか。舞台上で役割を演ずる役者は、その台本作者の制作した筋書に添って、あらかじめ作られた役を演ずるだけで、演技上の個性的表現に或程度の許容はあるにしても、役柄そのものの変更が許されるわけではない。役者の演技に対する台本作者の主導性は、その意味で絶対的であろうとも、事からそのものは罪のないことである。ところが社会的役割の作者である社会の役割賦課は強制的で一方的であるとされる。社会のこの主導性が肥大すれば、それだけ個人の創造性や自発性を含む個性は萎縮する。デニス・H・ロングは述べている。「社会学的理論が社会の安定と統合を過大に強調すると、われわれは人間が魂の抜けた、良識に動かされ、地位をのみ求める亡者を思い浮べる羽目におちいる。」〔18:46〕 またこの種の人間を極言して「舌だけがへらへらと急がしく、心の中に絶望と暗さをかくす動物」〔ibid.〕とも批評する。

ところで上述の語呂あわせは、役者は演技が終われば、その役柄をさらりと脱ぎすてられるが、人間の場合は役割の着用が宿命的にその人に定着する、という違いを無視するものであってはならない。ダーレンドルフ自ら注意を怠っていない。「役者に所与の役柄において規定さ

れた行動範型と所与の地位にある人物に社会的に規定された行動規範との間の類推ほど尤もなものはあるまい。しかしながらこの種の類推は人を迷わすことがある。事からの非現実性が劇場では想定されているのに、社会においてはそれは想定され得ない。『役割』の劇場的語意がどうであれ、役割を行使する社会的人物が仮面を外すだけで本当の自己として現われ得ると見るのは誤りであろう。〔15:13〕そこには2つの類推、1つは舞台の上の役者と社会的役割の担い手としての人間との間の、もう1つはその役割人と「われわれの経験に属する未分化の個人」との間のそれをめぐる慎重な取りあつかいがある。これらの類推に関係をもつ諸項目ないし諸概念が強調され、絶対化されるほど固定化と実体化が昂進するように思われる。類推に対しては慎重な態度を失わないダーレンドルフが、事柄の実体化については、或るときは寛容であり、或るときは肯定的ですらあるのは奇異な感じをおこさせる。しばしば論難の的となった Homo Sociologicus の実体化に対する彼の態度はその適例である。『実体化』について彼自ら定義して「良き理論のための、考え抜かれた非実在論的仮定が哲学的・人類学的叙述として意味を変えられ誤解されること。〔14:201〕（なおこの「哲学・人類学的叙述として」は彼自らの手による英語版では「人間の本性についての実在論的叙述として」〔15:77〕とされている。）といわれる。「いうまでもなくこの種の実体化に対して、身をまもるのは容易でもあり、必要ですらある。」としながら、「範疇や命題の実体化を、たとえ経験的にはほとんど不可避のものとするほどではなくても、すくなくとも、はげしく勧告する或る種の性癖がありはしないか、が問題に付されねばならない。私はこの種の性癖があること、またこれによって始めて、社会学的人間像の、本来は方法論の問題が認識され得

るものとなることを信ずる。〕〔15:201〕と主張する。これらの主張は「まさに私を、この種の実体化で非難するのは、何よりもいささかグロテスクである」〔ibid.〕と退ける F・H・テンブルックの批判に答えるものであるが、ダーレンドルフはここでひらきなおって実体化の非難の意味のすくないこと、ないしときとして不当であること、を認めようとする。その第1の理由は、社会学が経験科学としての立場をあくまで守ることの困難——いいかえればより良き理論のための、考え抜かれた非実在論的仮定が維持されにくいことにあると考えるのである。非実在論的性格をもつ Homo Sociologicus が理解されないかぎり、その実在化は避けられないのである。第2の理由は科学の世界の「一般的公開性」にもとづく、Homo Sociologicus の科学の領域の外への普及であって、もはやこのものの非実在論的意味合いはどうでもよいこととなる。〔15:203〕

このようにしてダーレンドルフの Homo Sociologicus の実体化の是認は、このもののあえて「考え抜かれた非実在論的な仮定」の放棄、すなわち社会学者が「その論理的公正という快適な避難所から出て、moralisch な対決の激動の中に入って行かねばならない」〔15:204〕運命を負って「その誤解された理論の人類学的な解釈に対して立場を決定しなければならない」〔ibid.〕事情を物語る。このようにして彼は「現実の全一的存在としての人間」のもとに立ち帰る。しかしそのことは非現実的な Homo Sociologicus の放置によって、この全一的人間が全面的に実体的存在であることへの承認を意味しないではおかぬ。それが1973年新版の述懐の意味であり、初版以来の副題の示す Homo Sociologicus の限界を指すものではないであろうか。このようにしてダーレンドルフは、固定化され実体化された社会と人間とを、対極化さ

れた並列において、社会学教科書の中に、依然として放置するのである。

IV

ピアジェは「あらゆる領域で認識論的態度が、構造的法則をもった全体性の承認か、それとも要素から出発する原子論的合成かといった二者択一に帰せられると思ひこむのは誤っている。」〔2:9〕という。われわれの「社会」と「個人」の両極化にも、このことは該当するように思われる。ピアジェはしたがって (1)原子論的連合の図式と (2)発出的全体(直接的全体性)の図式を越えて「第3の立場」〔ibid.〕があることを主張する。エリアスもまた、それに対応する原子論者と全体把握論者の2つの立場に対決を挑む「第3の道」を示唆することについては前述した。われわれも、ようやく「第3の道」の探求を要請されるころへ到達した。本論においては、ここにいたるまでの理論の展開の経過を十分に論究したわけではない。第3の道の本格的な探求の問題とともに、次の機会をまって検討したいと思う。

参 照 文 献

(本文中、括弧内の:の前の数字は以下の目録に頭書された番号、後の数字はその引用または参照

頁数を示す。)

1. 安西文夫「社会学における類推の問題」明星大学社会学科研究報告 第12集
2. Piaget, Jean, *Le Structuralisme*, 1974.
3. Elias, Norbert, *What is Sociology*, 1978.
4. Lundberg, George A., *Social Research*, 1951.
5. —, *Foundations of Sociology*, 1939.
6. Lewin, Kurt, *Field Theory in Social Science*, 1951.
7. Giddens, Anthony, *Durkheim*, 1978.
8. Keat, Russell and Urry, John, *Social Theory as Science*, 1975.
9. Fromm, Erich, *The Sane Society*, 1976.
10. Cooley, Charles H., *Human Nature and the Social Order*, 1922.
11. Mead, George H., *Mind, Self and Society*, 1934.
12. Litt, Theodor, *Individuum und Gemeinschaft*, 1919.
13. Gurvitch, Georges, *La vocation actuelle de la sociologie*, 1950.
14. Dahrendorf, Ralf, *Pfade aus Utopia*, 1967.
15. —, *Homo Sociologicus*, 1973.
16. Berger, Peter L., *Invitation to Sociology*, 1966.
17. 安西文夫「集団の全体性の問題」『人文研究』第4巻第11号
18. Wrong, Dennis H., *Skeptical Sociology*, 1976.

(あんざい ふみお 本学教授)